

「1月20日」を忘れない

標題は朝日新聞1月19日の坪井ゆづる「社説余滴」である。とにかく流されやすい中で、こうして継続的に、しつこく問題に迫ることはメディアとして大切だ。昨年と同じような「社説余滴」を読んだ記憶がある。私も加計疑惑の記憶が、だんだんと薄れてきたのでレポートにきちんと記録しておこう。

あす、安倍首相は施政方針演説をする。歴代最長の在任記録を伸ばし続ける宰相として演壇に立つ。

その胸中に、2017年「1月20日」は、どう刻まれているのだろう。

この日、首相が議長をつとめる国家戦略特区諮問会議が、加計学園の獣医学部新設計画を認めた。首相の「嘘」が疑われる答弁の中心部分でもある。2年前も昨年も、この欄で指摘した話だが、ことしも、あえて書く。まず、経緯をたどろう。

加計問題が国会で取り上げられたのは17年春から。「総理のご意向」といった文書が次々に判明。首相と加計孝太郎理事長が「腹心の友」だったことから、行政がゆがめられたとの疑念が渦巻いた。そして7月、首相の仰天発言が飛び出す。認可当日の「1月20日」まで、加計学園の計画を知らなかったと言ったのだ。申請時点の15年に知ったという従来の方針を撤回した。



知らなかったのだから、指示も忖度もありえぬ、という論法だ。

嘘だろう。野党は、そう見た。当然である。加計理事長は16年夏に、農林水産相や地方創生相に獣医学部の話をしていた。同じころ、首相と何度も食事やゴルフをしている。「総理は自分の口からは言えないから、私が代わって言う」と語ったと名指しされた首相補佐官がいる。選考過程で、加計学園を利する「条件変更」を、首相周辺が施したとみられる文書もある。

さらに15年の申請前に、首相秘書官が官邸で「本件は、首相案件」と言ったというメモまで出てきた。だが、政治家も官僚も、「知らぬ存ぜぬ」で押し通した、与党は加計理事長らの国会招致を拒み続け、いまに至る。

いまや加計問題は記憶のかなたの人が多だろう。しかし、「1月20日」答弁は忘れまい。これがまかり通ったことで、説明責任に背を向ける長期政権がつくられてきたのだから。森友学園問題も「桜を見る会」も構図は同じ。その意味で、加計問題は昔話ではない。

つくづく思う。権力者にとって都合な事態を、時間とともに忘れてゆくのは、それを容認するのと同じだ。

(2020年1月23日)